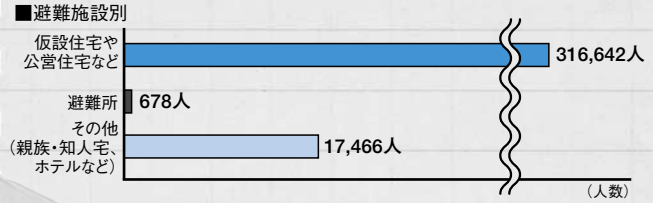
忘れないで。3.11

昨年3月11日に発生した東日本大震災から、まもなく1年。
地震と津波、そして原発事故によって瞬時に奪われた日常を、今なお取り戻せずに苦しむ被災者が数多くいます。
ここでは、そうした方々を被災地や市内で支援する市民活動団体へインタビュー。
活動の現状や、被災者を支えるために必要なことをお伝えするとともに、
被災者支援の活動をみんなで支える仕組みを紹介します。

被災者の状況

全国の避難者数 334,786人（昨年12/15現在）
※東日本大震災復興対策本部事務局調べ



札幌市への避難者数 1,420人（1/16現在）
※うち、公的住宅入居者は1,038人。その他は市の把握分のみ算入

被災地で支援

人口流出が止まらない被災地。地域の暮らしを立て直したい。

震災直後の3月13日には、津波で甚大な被害を受けた岩手県釜石市に駆け付けたNPO法人「ねおす」。以後、釜石市を拠点に、地元の方々、ボランティアと共に復興支援活動を続けています。

ワカメの種付けをしたロープを海に沈めるための土のうを作る、職員とボランティア。

NPO法人ねおす代表
高木（たかぎ） 晴光（はるみつ）さん

自然体験活動を行うNPO法人ねおすを1999年に設立。札幌や黒松内などを拠点に、農山漁村と都市との交流事業にも取り組む。

―震災2日後には被災地に入ったそうですね。

はい。釜石市に実家のある職員がいたため、翌日にはその職員と一緒に被災地に向かいました。ワゴン車に食料や毛布を詰め込んで現地に入りましたが、津波で壊滅状態でした。

―どのような支援活動をしたのですか。

当初は物資不足が深刻で、ワゴン車3台で燃料や下着などを何度も運びました。避難所生活が続いていた時は、出張フリーマーケットや炊き出し、がれきの撤去を行ったほか、子どもの遊び場づくりや、高齢者に農家の手料理を振る舞う活動などを行いました。

―今、被災者の一番の課題は。

家も仕事も失い、失業保険が切れる中、生活の再建が急務です。釜石では、市内での再起を諦め約3千人が転出したといわれます。

―漁業や起業の支援にも取り組んでいますね。

9月には、ワカメ養殖の再開を目指し、漁師やボランティアと3万個の土のうを作り、海に沈めました。今は地域の食堂を作ろうと、メニュー作りなどのお手伝いをしています。地元の人は、私たちのような外の人間の支援を積極的に受け入れ、立ち上がろうと懸命で、その姿から、人の強さやつながりの大切さを学ばせてもらっています。

―皆さんに一番伝えたいことは。

とにかく現地に行き、被災地を見てほしい。津波を受けた街は今も想像を絶する光景です。そうした中、飲食店や旅館などが徐々に再開し始めました。閑散とした街に観光客が戻って、経済が動き出せば、復興のきっかけになります。